

高品質生産、省力を同時に可能にする花壇用苗物の施肥管理技術

研究のねらい

群馬県における花壇用苗物（以下、花壇苗）の施肥体系は、鉢上げ後、根が活着した段階で粒状高度化成肥料を、粒数を数えながら手で表面施肥する方法が一般的で、一部の品目は出蕾～開花期に葉色を観察しながら、さらに液肥を施用して、出荷を迎えます。

そこで、花壇苗生産における品質向上ならびに追肥作業の省力を目的に、被覆複合肥料（※）の全量基肥施肥管理について検討し、その技術を確立しましたので紹介します。

技術の特徴

- 1 秋出しパンジーの3.5号ポット生産では、鉢上げ時に鉢土の表面へ、リニア70日型(14-12-14)を鉢当たり1.5～2.0g施用すると、粒状高度化成(10-10-10)2.0g施用と比べ分枝数が多く、開花が早まり、開花揃いも良くなります。特に1.5g施用は、鉢サイズに対して草姿のバランスも良くなります(写真1)。ただし、パンジーでは肥料が苗に触れると肥料焼けにより、生育が不揃いになりやすいため、苗から離して施肥するよう注意します。
- 2 春出しペチュニアの3.5号ポット生産では鉢上げ時に鉢土の表面へ、リニア40



写真1 パンジー開花時の状況
(左からリニア70日型1.0g、1.5g、2.0g、
白囲みが粒状高度化成2.0g)

日型(14-12-14)を鉢当たり1.0g施用すると、粒状高度化成2.0g施用と同程度の生育となり、開花揃いが良くなります。

- 3 サルビアの3.5号ポット生産では、鉢上げ時に鉢土の表面へ、春出しはリニア40日型を鉢当たり3.0g施用、夏出しはシグモイド70日型(14-12-14)を鉢当たり2.0g施用すると、粒状高度化成2.0g施用と比べ葉色が濃く、分枝数も多く、商品性に優れた苗が生産できます。
- 4 被覆複合肥料の施肥作業は、当センター開発の花き鉢物用定量施肥器「ショット君」を使うことで、粒状高度化成の手置き施用と比べ、作業時間を6割削減できます。



写真2 定量施肥器ショット君による施肥の様子
(右下は、施肥後の拡大写真)

今後の取り組み

花壇苗は栽培品目数が多いため、上記以外の各品目について、普及指導員、営農指導員と連携し、被覆複合肥料の種類や施用量をさらに検討します。

※ 別名、コーティング肥料。溶出形態としては、施用初期から溶出を開始するリニア型と、ある一定期間溶出を抑制し、その後急激に溶出が始まるシグモイド型の2種類があります。

(執筆者：古屋 修)